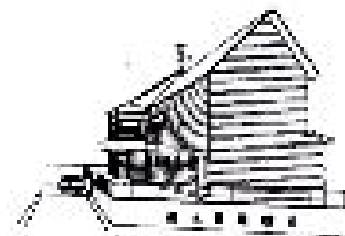


<今朝の聖書から> ネヘミヤ記から学ぶとき、エズラ記とともに読むのはとても役に立つことですのでお勧めします。ほぼ同じ出来事を、少しばかり違う記録と観点から記されています。神様と私たちとの関係ということを考えるとき、だいたい三つの理解がある様に思います。第一のものは論外ですが、神様への信仰というものは、信じる人にはあるだろうが、私とはあまり関係のないものという立場です。第二のものは、都合がよい時には私も神様を信じることにしようというものです。こう考えてしまうと“不利益をもたらす神様はお断り”ということになってしまいます。そして第三の立場は“神との関係を疑わない”という信仰者の立場でしょう。“私の教会だから素晴らしいものでないと困る”、“そのために私は力を尽くす”という思いがここから出てきます。ネヘミヤも信仰を疑うということは決してしませんでしたし、今の状況とは関係なく“神様による回復の保証”をも疑いませんでした。囚われの地でネヘミヤは、慎重に振る舞い、身の安全を確保することになります。この交渉が続きます。王の飲む酒の毒見をするのがネヘミヤの仕事になっていましたが、彼は、ただ先祖の町のことを願い出ます。“先祖の町(すなわちエルサレム)”を再建する仕事をさせてほしいというのです。王妃はネヘミヤに好意を持っていたらしく“いつ帰るのか”と言います(実際は12年になってしまうことになります)。7節に“わたしはまた王に申しあげた、「もし王がよしとされるならば、川向こうの州の知事たちに与える手紙をわたしに賜わり、わたしがユダに行きつくまで、彼らがわたしを通過させるようにしてください」とあります。自らの安全と、再建の仕事が妨害されないように、できるだけ配慮をしたのです。10節以降、ネヘミヤは、困難な神殿再建という作業に着手することになります。“しかしわたしはついに言った”で始まる17節以降、神殿再建が開始されます。“それはできない”というものは誰もいませんでした。アルタシャスタ王は、イスラエル人ではありませんでしたし、ネヘミヤもこのことで王と争うことはしませんでした。しかし神殿再建は、イスラエルのためになされることでした。その次になされたことは、読み進むと描かれています。徹底的な民族のアイデンティ(異邦人ではなく主の民であるということ)の回復でした。家族にまで入り込んだ、異邦人との関係を排除しました。片手に剣、片手にスコップを手にして進められ、完成させることになります。私たちの課題は何でしょうか？

週報

2009年 5月 3日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル一会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡市清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp